

氏名(本籍)	蓮見孝(東京都)
学位の種類	博士(デザイン学)
学位記番号	博乙第2301号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	参画型デザインングの研究 -生業性に着目した地域振興プロジェクトの実践を通して-
主査	筑波大学教授 工学博士 安藤邦廣
副査	筑波大学教授 農学博士 鈴木雅和
副査	筑波大学助教授 博士(工学) 野中勝利
副査	千葉大学教授 博士(工学) 清水忠男

## 論文の内容の要旨

本論文は、少子高齢化や産業の空洞化により衰退が著しい地域を、これからの社会的課題の研究対象地とみなし、その再生・振興に対し、デザインが果たし得る役割や方策について論考・提示することを目的としている。「生業」という日常的行為に着目し、人びとが潜在的に有するデザイン力を発見・発掘し、さまざまなデザインの行為を実践し合い生活の場を整え合っていくとする「参画型デザインング」に着目した。7つの地域振興プロジェクトを実践しながら参与観察をおこない、その効果や問題点、課題についてまとめている。

第1章では、研究テーマを設定するに至った背景と経緯について述べ、デザインを地域に効率的に普及させるために、「参画型デザインング」という方法論に注目している。

研究目的を達成するために、「地域の諸問題」、「参画型デザインングの概念と方法論」、「生業性に着目した地域振興プログラムの設計と評価」、という3つの研究課題を設定している。

また本研究のクルーとなる「参画型デザインング」、「生業性」、「地域振興」という3用語について、その意味や概念を定義している。

第2章では、「高齢・小児化と過疎化による活力の衰退」という地域問題に取り組むためのデザインの課題として、「生きがい」「生業性」「コミュニティ力」という3つの研究課題について、主に文献研究を通して論考している。

参画型デザインングを実践するための参考として、日本全国で展開されているまちづくり事例に注目し、生業性に関わる7事例の現地調査内容を紹介し、それらの共通項を一覧表にまとめている。

海外のまちづくり事例として、イギリスの「TCM」と「ショップモビリティ」の現地調査をおこない、日本との比較をおこなっている。

第3章では、参画型デザインングの方法と手順について、企画・実践してきた啓発プログラムと、コンラティブ発想法やコンカレント・ワーク手法といったワークショップの手法を紹介している。

さらに、筆者が関わってきた地域振興プロジェクトの内から代表的な7プロジェクトを事例として選び、その内容と参与観察の経過を、概要、背景、端緒、方針立案、経過、成果、総合的評価、将来性という項目

により報告している。その上で、参画型デザインの特質や産業技術的デザインとの差異について論考するとともに、各プロジェクトで観察された共通項を抽出して一覧表にまとめている。

第1の事例は、「地域中小製造業支援プロジェクト」である。自社製品の開発経験に乏しい地域中小製造業を対象にしたインキュベーション・プロジェクトを立ち上げ、製品の企画・開発のノウハウを経験的に付与する活動をおこなった。

第2の事例は、「純県産酒のブランディングプロジェクト」である。新たに県内で開発された酒米と酵母のみを使用した純県産酒のブランディングを、酒造組合を中心とする産学官のプラットフォームにより推進した。

第3の事例は、「酒蔵再生プロジェクト」である。廃業の危機に立たされた酒蔵を、蔵元と大学が連携し、酒蔵ギャラリーとして整備することにより再生を果たした。

第4の事例は、「石材業活性化プロジェクト」である。石材業活性化をめざす組合と大学が連携し、衰退が深刻化する地域伝統産業の振興を図るコラボレーション型の参画型デザインを実践した。

第5の事例は、「にぎわい商店街づくりプロジェクト」である。空き店舗を活用した商店街の交流スペースを拠点に、学生達と共に商店街のまちづくり活動に参画してきた。

第6の事例は、「花のまちづくりプロジェクト」である。新都市の殺風景なセンター地区を対象に、国際的レベルの花のまちづくりを進めようとする市民団体の活動に参画した。

第7の事例は、「都市・農村交流拠点づくりプロジェクト」である。都市・農村交流拠点づくりに際し、公共施設の「使い手」である住民自らがその企画・デザインに参画するプログラムを運営した。

第4章では、参画型デザインに対し総合的な考察をおこない結論をまとめている。

現代社会の諸特性とは異なる参画型デザインの特質について、内発性、プラチック性、成長性を挙げている。またその効果について、「生業性の再生」、「生きがいの生成」、「コミュニティ力の育成」を挙げ、特に「QOL（生活の質）効果」に注目している。アンケート調査により、参画型デザインにはQOLを総合的に向上させる効果が見られることを明らかにしている。

最後に、地域と大学が一つになって地域を学びの場にし、地域の尊厳を高めていくようなソシオ・デザインとしての参画型デザインのプログラムやプロジェクトの必要性を指摘し、本論文のまとめとしている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

現代の地域社会の抱える産業の空洞化という深刻な課題に対して、デザインの分野から取り組んだ実践的で先駆的な研究であるところに本論文の特色がある。

従来、地域の再生や振興という課題について、町並みや景観の整備を主としてまちづくりや地域づくりが行われてきたのに対して、本研究の生業性に着目した地域振興プログラムの提案は、独自で斬新なものといえる。そのプログラムの開発設計を行うにあたって、日本の各地の取り組みや海外の先駆的な事例についての実地調査を幅広く行い、その比較分析を通じて、参画型デザインという方法を導いた手順は適切で説得力がある。その参画型デザインによる7つの地域振興プロジェクトの報告は、新しい領域を切り開く研究資料として価値が高い。

本論で提案された参画型デザインの方法論は、必ずしも実証され、方法論として確立されたものとは言い難いが、地域産業の再生という困難な課題に対して、生産者だけでなく、利用者や地域住民という広がりを持つ場を設け、生業をデザインするという新しい方法の有効性を示した研究として高く評価できる。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。